

支部例会の栄枯栄 - 盛衰盛

岡崎 篤

1. ことの経緯

一年程前のことになりますが、「日本物理学会九州支部の50年」という題で、1996年11月23日に大分大学で開催の支部例会で講演をするようにという依頼が、支部委員長からありました。「私よりも遥かに適任の先輩方がおられます」と申しましたところ、「最近停年退職をした人というのが講師の条件の一つである」とのことで、止むを得ずお引受けしました。当日、会場では、この題目から、「九州での物理学の足跡と将来の展望についてアカデミックな話を聴くことができる」と期待された会員もおられたようですが、それは私の能力外ですので、題目どおり、支部の活動の歴史についてお話しすることにしました。

ところで、多数の会員が興味を持たれるのは、1946年支部発足当時など、比較的古い時代の状況ではないかと想像しますが、私が支部委員を勤めましたのは1973年からの15年間であり、それ以前のこと、すなわち支部50年の歴史の前半分については、私は良く知らない訳です。この種の問題に限らず、常々私が頼りにしているのは松村温氏ですので、当時の記録、さらには記録の探し方についてお尋ねしました。もちろん、大変有効な助言を頂きましたが、加えて、同氏は、支部創設当時委員の先生方を助ける幹事の役を勤められたこと、また、第一回の支部例会の最初の講演のスピーカーであったことなどが分りました。同氏が並外れた記憶力の持ち主であることは、多くの方がご存じと思います。ご本人には失礼ですが、今のうちに、支部の歴史についていろいろ書き残して頂くことが大事ではないかと考え、その実行を、大分での講演の際に提案致しました。

今回の企画は、このような流れで実現したと理解しております。実は、私自身が何かを書くということは考えておりませんでした。今回の企画の一部として、大分での話を中心に書くようにとの話が委員長からあり、これまた押し切られて、止むを得ずお引き受けしました。自分が言い出しておいて止むを得ずとは何事だと叱られそうですが、私の言い分はこうです。「支部の50年」などという題で、あのような場で、大学卒業年次が40年以上にわたって分布している多数の方を対象に話をするとすると、いくら記録に基づいた話とは言っても、ストーリーの組み立てに少しは神経を使ったり、あるいは少々差し障りのある話を盛り込んだりしないと、50分もの間、聴衆が眠らないように話をするというのは、私にはとても無理です。その内容を書き物として残すとなると、この差し障りのある部分が益々差し障りがあることになってしまうので、ペンを執るのは甚だ気が重いのです。この言い分に対して、委員長は、そういう部分はカットして良いと言われましたが、そこをカットすると、今度は話が迫力の乏しいものになる惧れがあります。結局、以

下に書きますことは、大分での話の線に概ね沿ったものとなりました。

2. 支部発足当時のこと

当時についての詳細は、本企画での松村 温 氏の文にお任せします。ここでは、大分でご紹介した写真について記します。第一回の支部例会が開催されたのは、1946年9月ですが、同じ月に、九州大学理学部創設（1939年）の中心人物であった西 久光 教授の退官を記念して、物理学科で撮影されたのが、本誌第2部に掲載の写真です。講演内容については、委員長から、「九州大学理学部物理学科の話ではなく、支部の話をするように」と、注文がついていました。しかし、当時の支部会員の大部分は九州大学箱崎キャンパス（理学部、工学部、研究所）の人達であり、私が予稿集に転載した第1回～第3回の支部例会および第一回物性論分科会のプログラムに名前が出ている方の内、実に13の方がこの写真に写っておられるということもあって、講演の冒頭でこの写真を使用しました。登場人物の氏名（敬称略）を記します。

【前列左から】 伊勢田 土岐、野上 茂吉郎、田村 次雄、武藤 俊之助、伊藤 徳之助、西 久光、岡崎 篤義、篠原 健一、原島 鮮、水野 善右衛門、岡田 利弘

【中列左から】 笠（長野） 典生、森田 右、井上謙蔵、松村 温、山下 次郎、井上健男、竹村 哲男、河井 直幸、上田 幾彦、淀川 寛

【後列左から】 江口 鉄男、渋谷元一、高良 和武、富田 義一 の諸氏です。

ここには、物理学科の初代の教授および助教授の大部分が写っておられますが、武藤教授が丁度40才位、岡田 助教授が27才位、山下 次郎 氏（第一回）以下の卒業生の方達も20歳台で、現在の研究者の年齢構成に比べて随分若い構成です。撮影の場所は、理学部6号館横です。服装も当時の世相を反映していて興味深いと思いました。なお、氏名などについて、江口 鉄男、上田 幾彦 両氏に教えて頂きました。

3. 支部例会の足跡

3.1 記録から見た足跡

日本物理学会定款および細則（本誌第3部）で明らかのように、支部活動の主なものは、例会の開催です。先ずはその足跡を辿ってみます。初期の頃は、九州支部のみでなく、各支部で年4回の例会が開催されたことが、日本物理学会誌の記録で明らかです。それに加えて、学会発足からの一年間に、東京で物性論分科会が3回開催され、九州支部会員の発表も少なからず行われています。当時の劣悪な交通事情（といっても、それが理解できる人はすでに少数派になってしまったかも知れませんが）などを考えると、これは驚異的なことです。このように頻繁に研究集會が開催できたのは、当時の研究者の年齢構成

が、全国的に比較的若年層に中心があつて、全体としてエネルギーであったこと、戦争で発表の機会が無かつたため、データが蓄積され、発表意欲が非常に高まつていたことなどによると思われますが、松村 温 氏によりますと、「当時は他にすることが無かつたから」とのことでした。

初期の例会のプログラムを見て気付くことは、開催回数が多いだけでなく、毎回の発表件数も多く、テーマも新鮮味のあるものが多かつたということです。それはともかく、最初の10年間に、九州支部例会は35回開催されました。しかし、発足10年後、すでに当初の勢いは無くなつていたようです。下表は、講演で使用したOHPのコピーです。縦軸は時間で、発足から10年毎の目盛が付けてあります。その年数に下線が付いている場合は、支部例会の開催が順調に行われたことを意味します。以下、暫くこの表に沿つて話を進めます。

日本物理学会九州支部

1946 支部例会 年4回

第31回 2件

1956 第35回 応物支部と連合 6件

第49回 九工大（八幡製鉄見学）4件+特別講演

1966

中止した例会

74秋

76秋

1976 77夏 （以後、秋の例会は九大以外で）

80夏

委員長

宝来和巳（81）

中山正敏（82）

平川一美（83）

久保英範（84）

秋 例会（講演募集要領、予稿集）

夏 シンポジウム

1986

1996

この表が示しているように、支部の歴史の半分は、例会の開催が満足には行われなかつた期間である訳です。私の目から見たこの辺の事情を少し具体的に記します。上の表

で、最初に下線が付いた1956年には、私は大学院博士課程の1年目でした。年に2回、物理学会の年会と分科会で発表することが当面の目標でしたが、支部例会というのは、全く眼中にありませんでした、というよりは、その存在を知らなかったというのが実情でした。周囲の先生方は支部委員などをしておられた筈ですが、支部例会で発表するように言われた記憶がありません。1949年の新制大学の発足で、物理学科が各地に設置されたことに伴い、支部会員の分布は広範囲になりました。1954年に例会が熊本大学理学部で開催されたことから、そのことが分かります。しかし、例会の発表件数は減少の傾向を続け、2件、それも同一人による2件などという場合もありました。

当時の委員会も苦慮されたことと推察します。応用物理学会九州支部（応物支部）と連合で例会を開催する、あるいは工場の見学会をアトラクションに付けるなどの対策も講じられています。そうした中で、私が支部例会を意識し実際に参加したのは、第49回（1962年）九州工業大学での例会でした。九大からは、大型スクールバスで行きましたが、発表は4件（+特別講演）のみ。私が本当に参加したのは、午後の八幡製鉄（株）戸畑工場の見学のみで、午前の講演の間は、後輩達と、開通直前の若戸大橋を見に行っていました。この日の例会が終生忘れられないものになったのは、上記工場で見えたストリップミル（圧延機械）の迫力のためです。巨大な灼熱の鉄塊が、薄板鋼板になって巻取られて行く自動的な流れ作業を身近に見て、わが国の経済復興を肌で感じた気分でした。しかし残念だったのは、肝心の自動制御の圧延機がまだ国産ではなく、米国製であったことでした。

その頃の例会で、例外的に盛会だったのは、応物支部と共催の1970年秋の例会です。当時の観光のメッカであった宮崎で開催されたこともあって、34講演（+特別講演）の大盛況でした。しかし、この後、応物支部からは敬遠される状態が続き、以後、連合の例会は開かれていません。

3. 2 支部委員として体験した期間

1973年、当時支部例会は年2回（6月、12月）の開催となっていました。その年初めて、私は支部委員に選ばれました。私は助教授で、他の委員はベテランの教授方でした。驚いたことに、慣例により私は委員長をやることになってしまいました。その慣例とは、「委員のなかで、委員長を勤めてからの年数が短い委員から、順に委員長の役を免れることができる」という内容のものです。一見、合理的ですが、初めて委員に選ばれた者が、このルールで委員長をやらされるというのは納得し難いことでした。しかし、これまでずっとこれでやって来た、と先輩委員達に宣告されては抵抗の仕様がありません。どなたも、初めて委員に選ばれた時、先ずは例外なしに、このルールに疑問を感じられたことと思います。私の場合は、幸いなことに、強力なサポーターが存在しました。物理学科の同期生で、当時九大工学部助教授だった平川一美氏です。彼は委員ではなかったのですが、「せっかく委員長になったからには、思い切って新しいことをやれ。」と励まし

てくれました。委員長としての最初の秋の例会について、「特別講演に生物物理関係の話を選んで」と言う訳で、福岡大学医学部生理学教室の富田忠雄教授を講師に推薦してくれました。会場は、水野善右衛門先生にお願いして福岡大学を使用させて頂きました。この時の例会の講演申込は6件、内1件は九大工学部（当時）の江口研究室から、残りは平川一美氏のグループからでした。

この例からも伺えるように、例会の成立は、特定の間人間関係に依存しているような所がありました。（今風にいうと、そういう部分がありました。）申込締切後に開かれるプログラム編集の委員会の時点では、申込がほとんど無いのが常識的で、委員の研究室から一、二件を捻出したり、協力的な先生（例えば、九大工学部（当時）の瓜生典清氏）に電話して、急遽演題を用意して頂いたりするといった具合でした。従って、「本来あるべき申込が無いのに、そこまで無理して開催することはない」と、委員会が理性的に判断すれば、例会は流れることになりました。その頃に流会となった例会は、前出の表に示したように4回に達しました。九大理学部での開催の場合、特に申込が少ない傾向があったため、1977年以降、秋の例会は九大以外の場所で行うことになり、1977年は長崎大学で開催されました。因にこの例会には12件の講演申込がありました。翌年夏、九大で開催の例会では、申込は5件でした。

もう一つ、平川一美氏から注意されたことがあります。それは、支部発足以来、支部の実質的な運営母体であった九大理学部物理学教室に対する批判と言うか、不満と言うか、そういう内容のことでした。彼が言われるには、「外の会員の声を知っているか。あの人達は、『委員である九大物理の先生達は、支部のことを本気では考えていない。目（心）は中央ないし世界に向きっぱなしである』と言っているぞ」と。これは、私には大きなショックでした。もちろん、私は外の世界を良く知っていた訳ではありませんが、九大の物理教室が、そんなに風変わりな集団だとは思っていませんでしたし、今でも、目を世界に向けるのは当然だと、思っているからです。問題は、支部委員としての態度なのですが、これも注意されるまでは意識の外でした。その後、幾度かの例会の折に、何人かの開催地の地元の方から、「支部委員の〇〇先生は全く姿を見せられませんね」などと苦言を呈されたのを思い出します。

ともあれ、当時の支部委員会は、例会をなんとか流会にしないようにと考えるのが精一杯であったと言えます。この状況は、1981年からの数年間を境にして大いに変わりました。前出の表に、当時の委員長のお名前を記しましたが、この期間を、支部の歴史の「特異期間」と私は呼んでいます。この4人の方は、皆さん九大理学部外（当時）の所属であったこと、皆さん支部の運営に積極的な意見を持っておられたことが特色です。

ここで、支部委員の選出の実情について記します。この選出は支部会員全員（現在約900人）の投票によって行われていますが、投票する会員はわずかに40人程度、したがって、得票が15、6票もあるとトップ当選、6票で当選というのがこの20年余の状況です。6票というのは、有名な先生という理由で書いた場合や、事情を知らない院生が

自分の指導教官名を特別の意識もなく書いてしまったというような場合が重なると、比較的簡単に集まる票数です。委員になった人は、自分が何票で選ばれたかを知ることが出来ます。わずかな票で選ばれて、しぶしぶ支部委員を勤めたというケースが、全く無かったとは言えないと思います。その証拠と言いますか、1974年に、委員会で申し合わせが成立しました。すなわち、「3年連続して委員を勤めた場合は、次の1年間は、仮に、投票で委員に選ばれても辞退することが出来る」ということになりました。1975年にこのルールが発効しましたが、最初の年に3人の辞退者が生まれたことは、委員会メンバーがかなり固定化していたことを示しています。一方で、現行の委員選出方法では、「あの人を是非委員に」と数人の会員の考えが一致すれば、それを実現するのは簡単であることとなります。先の特異期間の委員の中には、そのような周囲の期待に基づいて、(言葉は適当ではありませんが、ある意味での組織票で)選ばれた方もおられたかも知れません。

3. 3 特異期間

この期間の最初の1年を除くと、委員(委員長を含む)の半数以上が九大理学部外に所属の方達であったことも、この期間が「特異期間」になった一因であったと思います。それまでの委員会とは違った雰囲気での議論が行われました。(私は、辞退した1年を除いて、この期間の始めの3年間は委員でした。)先ず、例会を盛り上げる方策として、講演募集の際に、積極的な参加を呼びかけることとし、各地の会員の交流の促進と大学院生(特に修士課程院生)の発表の奨励を、例会の主要目的として位置づけました。これは、中山 委員長の時に実行されました。翌年、平川一美 委員長の時に修正されたスタイルのものが現在も使用されています。1996年版を下に引用します。

日本物理学会九州支部例会 講演募集にあたって

第102回日本物理学会九州支部例会を下記要領にて開催します。この数年、九州支部の研究活動を活発にし、同じ地域の異なる分野の会員間の交流をはかる... (中略)

- 1) どの大学の誰がどの様な研究に従事しているか、お互いに知り合うようにしたい。
- 2) 専門外の話も聞き、また聞いてもらって視野を広げる。
- 3) 年会、分科会や他の学会で発表したものでも、観点を変えてでも、あるいは少しでも進んだ結果が得られていれば、積極的に発表する。

(研究発表のみならず、物理教育に関する発表も含む。)

4) 予稿集を発行する。

以上の事項を考慮の上、奮って講演申込下さいませうお願いします。なお支部活動に関し御意見をお持ちの方は遠慮なく(苦言ももちろん結構)支部委員までお寄せ下さいませうお願いします。

この活性化のポイントの一つは、4)の予稿集の発行です。大方の(少なくとも私の)意見は、「これは会員の負担増となるため、講演申込の増加に対して負の作用があるのではないか」というものでしたが、応用物理学会九州支部での経験に基づいた、平川委員長の強い希望で実行されました。予稿集発行の単独の効果は不明ですが、この呼びかけ全体の効果の大きさは驚くべきものでした。その後、講演件数は増加を続け、1996年の大分大学での例会では、広い分野にわたっての127の講演が、5会場で並行して行われました。上の呼びかけがこのような大きな変化をもたらすとは、全く予想しませんでした。当時のことを思うと、全く隔世の感があります。

平川委員長の時に決めたことが、もう2件あります。一つは、交流の促進のための開催地の拡大です。それまで、福岡以外の場所での例会開催は随時行われてはいましたが、以後の例会は、当時未開催であった大分大学、琉球大学も含めて、いわば規則的に各地(各県)で開催することとし、各地のリーダー的な会員のご了解を得ました。大分大学では1985年、琉球大学では1989年に、それぞれ最初の例会が開催されました。もう一つは、夏の例会のスタイルを変えて、シンポジウム形式としたことです。この企画は1984年から実行され今日に至っています(記録は、第3部)。これは、年2回の例会という過密スケジュールを解消しただけでなく、会員の欲求を満たしたことが評価されると思います。少なくとも、現在のところ、成功していると言えるでしょう。

この期間に、委員会で何回か議論はしたのですが、結論に至らなかった件があります。それは、支部委員選出方法の改善です。論点は次のようなものでした。すなわち、現行の方法では、投票率があまりに低いために、「無責任投票」の比率が無視できなくなり、その結果シブシブ委員が生まれて支部の運営が活力を失う。この状態は改善の要がある。やる気のある委員を選出するため、推薦制を導入してはどうだろう。推薦母体としては、例えば県単位などはどうだろう。といった内容の案が平川氏から提出されました。物理学会の歴史を重んずる慎重論などが出て、「特異期間」内に結論に達しないままになってしまい、現在に至っています。この問題は、支部にとって根本的に重要な問題だと思えます。例会の状況が大いに改善されたため、差し当たり緊急度が低くなっていますが、いずれ見直しが必要となることと思えます。因に、親学会の日本物理学会委員の選出は、募集に応じた候補者相互の適任投票に拠っています(第3部、会則参照。九州支部の場合、支部委

員に選ばれた人は、親学会の委員募集に応募することになっています。なお、この他の支部会員が、親学会委員に応募することは自由です。） 会則の精神は、「会の運営はボランティアの委員が行う」ということにあります。支部委員の選出方法では、この精神が生かされ難くなっていると言えます。

4. 支部の歴史を振り返って

ここで対象にしている50年間は、日本の歴史の上でも特に変化の大きい50年であったと言えるでしょう。もっとも、その前の50年というのは、日清戦争直後から第二次大戦後までですから、これも変化の激しい期間と言えますが、世界の状況とか、科学とか、技術とか、すべてを含めると、われわれの50年は、世界的に見ても、非常に特記すべき期間であったと思います。それはさておき、支部の短い歴史からも、環境、状況の変化に対して適切な対応をすることが、いかに重要であるかが分かります。この程度の規模の組織でも、慣性モーメントは十分に大きいのです。常に先を見て、対策を講ずるのが委員としての任務であったと反省しています。一見順調な現在でも、問題が全く無い訳ではありません。例えば、例会の状況はどうでしょうか。1980年頃に比べれば、甚だ喜ばしい状況と言えます。しかし、5会場並行ともなると、参加者が分散して、討論をして貰える聞き手の数が不十分です。それ以前に、1講演当たりの時間が、（発表9分+討論2分）では、討論など始めから断念しているとしか思えません。もっとも、これは、例会をどう位置づけるかということと直結した問題です。そのほか、財政上の問題もあると聞いております。委員会が暇になることは無いのでしょうか。

ところで、組織に規則は付き物ですが、支部には元来規則が無いようです。残っているのは、手書きの「支部規定“案”」のみです。8条からなるその「案」の抜粋を、下に引用します。これは、発足当時に書かれたものだと思いますが、1958. 6. 21. 改正という書き込みがあって、第一条の「及広島以西ノ本州」が括弧に入っています。多分、この「案」が実質的な「支部規定」として効力を持ち、中国四国支部の成立に伴って修正されたものでしょう。年4回の例会開催は、この規定に従っていることも分かります。なお、先程記しました委員長決め方については、何も規定してないことにご注目下さい。（原文は、縦書きで旧漢字使用。）

支部規定案

第一条 日本物理学会九州支部ニ所属スル会員ハ次ノ如シ
九州地区及広島以西ノ本州ニ居住スル会員

- 第二条 本支部ハ年四回（三月、六月、九月、十二月）支部会ヲ開キ
學術講演（原著、綜合、通俗）、討議、事務報告等ヲナス
但シ必要ニ応ジ臨時ニ支部会ヲ開催スルコトアルベシ
- 第三条 本支部ニ講演ヲ申込み得ルモノ次ノ如シ
日本物理学会會員及會員ノ紹介セルモノニシテ支部委員ノ
適当ト認メタルモノ
（中略）
- 第六条 本支部ハ事務所ヲ福岡市箱崎町九州帝国大学理学部物理学教室
ニ置ク
- 第七条 本支部ニハ事務ヲ処理スルタメ若干名ノ支部委員及若干名ノ
補助員ヲ置ク
- 第八条 支部委員ハ支部所属會員ノ互選ニヨリテ之ヲ選出シ、ソノ任期ハ
一ヶ年トス 但シ重任ヲ妨ゲズ

記憶に自信がないのですが、この「支部規定案」の存在を、私は今回の講演の準備の段階で初めて知ったように思います。（そしてこれ以外の規定などが残っていないことも分かりました。）これを読んだとき、戦後、しかも物理学会の規則が、このような文体で書かれていたことに、私は時代の違いに驚くと同時に、ある種の感動を覚えました。この案が作られた当時、私は旧制中学3年でしたが、「勅語」とか、「漢文」などの例外を除けば、このスタイルの文に日常接することは無かったように記憶します。しかし、「九州大学五十年史」などを見ると、当時の大学の規則とか公式記録などは、やはり、このような片仮名使用の文語調で書かれていたことが分かり、ここでも時代を感じます。この「規定案」を読んだ時の私の違和感みたいなものを、今私が書いているこの文についても、50年後の人達は同様に感じるのでしょうか。いや、現在すでに、若い人達には、そのように見えているのかも知れません。

「規定案」を意識したことはないのに、支部委員としての私の行動は、この「規定案」に大体において従っていたことが分かります。結果として、これは「規定」として受け継がれていた訳です。発足当時、実質的な会員は、九大以外には例外的にしか存在しなかった訳ですし、鉄道も満足には機能しておらず、電話も普及していなかった戦後の時代です。そのような場合の委員の選出は、箱崎キャンパスの、お互い良く知った者同志の間でのことですから、規則としては、第八条の規定で十分だったのでしょう。これが50年後の現状に適したものかどうかは、論ずるまでもないと思います。そもそも規則は、組織の運営を円滑にするためにあるのですから、その時その時に適応したルールに改めるのが適当ではないかと考えます。

以前から、支部の事務について気になっていることがあります。この事務の仕事は、か

つては物理学科の助手の人達が交代で処理しておられたようですが、1971年からは、一貫して、副島 力 氏（現在、九大理学部極低温実験室）が担当して来られました。担当事項を具体的に記しますと、支部委員会について、開催通知を出し、それに列席し、記録を作成、管理する。例会およびシンポジウムに関する案内、プログラム、予稿集を印刷し、配布する。支部委員の投票の通知を発送する、などです。発送の作業は次の手順で行われます。まず、支部会員の名簿というものは存在しませんから、誰が該当者であるかが不明です。したがって通知を誰に発送するかは自明ではありません。日本物理学会名簿から該当者をピックアップします（約900名）。移動が結構あるので、この作業は毎年行う必要があります。組織に属している会員には、大学の教室ごとなどに纏めて発送しますが、個々に発送しなければならない会員が約200人、結局発送の宛先は300個所を下りません。これは大変な労力です。副島 氏は、これらの仕事を非常に几帳面に、しかも25年間（支部の歴史の半分）、続けて下さった訳です。（それ以前の記録が不完全なのに対し、この25年の記録は完全に保存されていることを付け加えておきます。）支部委員経験者は感謝の気持ちを十分お持ちと思いますが、一般の会員の方にも、この機会に、副島 力 氏のご尽力を知って頂きたいと思います。

大分での講演では、最後に、ここで、暇のある生活が良い仕事を生んだ例として、Edinburgh の教授職の選に洩れて失業中に電磁理論を作った J. C. Maxwell、疫病の流行で大学の閉鎖中に運動法則、微積分などの大仕事をした I. Newton、開業医としては暇を持て余し、探偵小説を書いて成功した、A. Conan Doyle のことをお話ししました。上の例は、特定の意図をもって引用したのですが、それはともかく、「規定案」の年4回例会は、過剰です。現状が妥当なところでしょう。ついでながら、親学会の年会、分科会（現在の両者に、実質的な差があるとは思えません）の年各1回開催は過剰、しかも全分野あるいはかなりの範囲の分野の会員が一箇所に集まることの必要性が疑問ですので、本来の分科会（1957年までの形態）を年1回開催し、会員は必要なら複数の分科会に参加するというのが良いのではないのでしょうか。（物理学会年会に相当する集会は、英国やドイツでは持たれていないように思います。）調子に乗って続けますと、会誌の発行について経済的に問題が大きければ、年6回または4回発行に変更しても良いのではないのでしょうか。（人事公募などは、ホームページの利用で対処できるでしょう。）会誌の配布を辞退する会員（グループとか教室で1冊で良い場合）の制度化、現行の終身会員制度の廃止なども検討してはどうでしょうか。書き出すと限りがありません。

5. 九州大学理学部物理学教室の初期のこと

今回の執筆に当たって、委員長から、標記のことも書くように要請がありました。九州大学理学部の発足は1939年です。私が学生として理学部に進学したのは1952年

で、それ以前のことは、一教授の子供としての記憶があるだけです。詳しいことは、次の文献を参考にしてください。一番目に挙げた「九州大学五十年史」は、物理学科事務室にも置いてあります。

九州大学五十年史 全3巻（通史、学術史上巻、学術史下巻）
九州大学七十五年史 全4巻（通史、史料編上巻、史料編下巻、別巻）
写真集 九州大学史 1911-1986
九州大学理学部 創立五十周年記念誌

公式記録は両「通史」に掲載されています。理学部創設に関する記事はもちろん一読の価値がありますが、九州帝国大学創設当時の記事もなかなか面白いです。

理学部初期の先生方が書かれた当時の思い出などは、「記念誌」に掲載されています。その中に、松村 温 氏の寄稿があります。この文は、創設時の物理学教室の人事について、選考を委任された東大の寺沢寛一、西川正治 両教授が、委任した側の西 久光 教授宛に出された書簡を紹介されたものです。それを見ましても、また、その後の実情を見ましても、多数の若い優れた先生方が東京から着任されたこと、その先生方を慕って優秀な学生が全国から集まったことが分かります。地元出身の一学生として残念なのは、10余年後に私が学生になった時には、その中のかなりの数の先生は、すでに東京に戻ってしまっておられたことです。その後の人事の結果として、九州大学七十五年史（通史242頁）に、「物理学教室問題」として記載されるに至った10年に及ぶ混乱を生じ、それによってさらに何人もの先生方および大学院生の転出を見ることになったのは、痛恨の極みでした。

直接の影響に加えて、この問題は現在に至るまで尾を引いていると言えます。上記の「九州大学理学部 創立五十周年記念誌」の発行についても、物理学教室の態度は及び腰にならざるを得ませんでしたし、思い出の執筆をお願いしても、お互い気まずい感じであったと、担当した人達の話でした。支部の活動も、当然この影響を受けたものと考えられます。例会が低調であった1956～76年の期間が、上記の10年間とその後の10年にほぼ一致します。私が助教授に就任した1964年には、物理学教室の教授および助教授のポストの約半数は空席でした。このような状況で、なお世界を相手に仕事をすると、支部例会までは手が廻りかねたというのが真相ではないかと思えます。1960年代末からの大学紛争も、支部活動を低レベルに保つ一因となったと言えます。

6. 世の中の様子

「九州大学五十年史」、「九州大学七十五年史」は、昔の風俗を知ることができる点

でも興味があります。それにヒントを得て、若い世代の会員のご参考までに、支部の歴史の前半に相当する時代のことを、少々書いてみます。

支部発足7年後の1953年に、戦後最初の国際会議、国際理論物理学学会が京都で開催され、その「流れ興行」の形で、多数の世界的な学者（H.J.Bhabha, J.deBoer, J.E.Mayer, J.C.Slaterら）が、九大で講演をされました。初めて見る外人の学者ということだけでも、学部4年生の私には、大きなインパクトでした。そういう先生達と討論する九大の先生達や先輩達を見て、大いに尊敬の念を抱いたものです。（当時、テレビは、NHKの技術研究所でテスト中の段階でした。）1956年には、第1回の物性若手夏の学校が、木崎湖畔で開かれました。講師は、植村泰忠、飯田修一などの先生方でした。九州からの参加者は九大の院生（新制、旧制共）だけであったと思います。この二つの行事は、レベルは大きく異なりますが、私の世代の九大物理の学生、院生にとって忘れ難いものです。

当時の国内の交通は、国鉄（現在のJR）が圧倒的な主役で、海外への旅行も、旧博多駅で万歳に送られた後、羽田から飛行機で（あるいは横浜から船で）という形が標準的でした。その国鉄も、特急「あさかぜ」が走る以前で、大阪まで12時間、東京まで21時間、普通急行「筑紫」などの座席に座って（運が悪いと立って）の旅でした。当時の物理学学会は、東京で開催される頻度が現在より遥かに大きかったので、山陽、東海道の沿線の様子の変化、特に徳山の石油コンビナート、京阪地区の電気関連工場などの次々の建設や拡張を見ることができました。現在では、工場が増えるのを見て喜ぶ人は少ないと思いますが、外貨の手持ちがほとんど無いほど国全体が貧しかった当時では、わが国の復興のバロメータを見ている感じで、非常に嬉しく思ったものでした。

1956年頃のラジオは真空管式でしたが、MT管使用の携帯ラジオ（ポケットサイズ）はありました。1962年には、もっと小型のトランジスタラジオが普及していましたから、変化は速かった訳です。しかし電卓はまだ普及しておらず、やっと利用できるようになった電動計算機（30万円以上もしました）の便利さに満足しておりました。九大中央計数施設で、最初の電子計算機（OKITAK）が稼働したのは、1964年でした。電話の普及も随分後のことです。1960年、当時の香椎、姪の浜は、行政上は市内でありながら電話は市外局で、しかも自動化していませんでしたから、電話局の交換手に頼んで繋いで貰うという通話方法でした。回線数が少なかったので待ち時間が長く、これらの地域への通話でさえ、現在では想像できないほど不便ものでした。1970年の九州大学職員録を見ますと、物理学教室の教授は過半数が自宅電話持ちですが、助教授は大部分が電話無しです。1960年、車はまだごく一部の人達のもので、走っている乗用車の大部分はタクシーでした。したがって、渋滞とかパーキングとかいう概念は、少なくとも福岡人には無縁のものでした。

話は戻りますが、支部発足当時、私は、戦災の後遺症で井尻から西新町まで通学して

おりましたが、西鉄大牟田線（通称急行電車）の運行は全く不定期で、2両編成の電車はいつ来るか分からない、ラッシュアワーには駅のホームに人が溢れるといった状況でした。やっと来た電車はすでに超満員ですが、そこにさらに押し込んで、ドアは開いたまま、各ドアに2、3人がぶら下がった状態で発車。車体の壁以外に手を掛けるものはないのですから、命懸けの通学でした。実際、悲惨な事故も起こりました。同期生の一人は、大橋駅から準急にぶら下がり、次の停車駅の平尾駅まで腕力が持たなくなり、高宮駅で落ちて即死してしまいました。校長が「遅刻しても構わないから死ななくてくれ」と、悲痛な声で全生徒に訓示したのを思い出します。学部時代は、城南線から九大前まで市内電車で通学しましたが、その期間に、この区間が乗り換え無しで行けるようになりました。それまでは、レールは繋がっていましたが、貫線、循環線、城南線は別個の運行でした。この通学でも電車にぶら下がっていました。旧式のチンチン電車には外のドアはありませんから、ぶら下がっても不思議はないのですが、ドアのあるボギー車でもドアを閉めず、ぶら下がり方を黙認して走っていました。天神町交差点には、しばしば占領軍のMP（米軍憲兵）が出て、格好良く交通整理をしていましたが、ぶら下がり電車を停めて何人かを降ろし、ドアを閉めて発車させるのを見たこともありました。

占領軍と言えば、軍事に関する教育研究の禁止に伴って、1946年に、全国の工学部航空学科は廃止されました。私の同期生は、後身の応用力学科で、自動車などの力学に関する教育を受けました。（平和条約発効後、九大では1956年に航空工学科が復活しました。）占領軍は、再軍備の動きを監視するため、全国の研究者のテーマにも目を光らせていました。私は、退職直前の整理中に、物理学教室が1946～47年に占領軍に提出した報告書の下書きを見つけ、九州大学大学資料室に届けましたが、それを見ると、実際に進行中の研究のみでなく、将来行う可能性のあるものも届けることを要求されていたように感じました。と言いますのは、私の指導教官の岡田利弘先生の研究題目に、「高温での単結晶X線回折」があったからです。先生がその報告を出された10年後に、私は正にこの方法を使った実験で、学位論文に向けての仕事を始めたのですが、その頃、先生が私を励まして、というか煽って言われた言葉から、それ以前に、少なくとも先生の周囲でこの種の実験が行われたとは考えにくかったです。その占領軍が、1950年、朝鮮戦争を機に、自衛隊の前身である警察予備隊を作ったのは皮肉でした。

朝鮮戦争は、私の学年が九大入学直後に始まりました。（前の学年は新制の一期生で、準備が整わずに9月開講でした。翌年4月一杯はその年度の講義が終わらず、二期生の入学式は5月にずれ込みました。）私は、教養部は、理科生のための第二分校（現在の久留米高専の場所）に入りましたが、文系の講義では、福岡から講義に来られる先生がかなりおられました。その中の一人、具島兼三郎先生の「政治史」は、立ち聞きが出るほどの人気でした。戦時中の言論弾圧と闘って来られた先生は、用心のためでしょう、講義のほんの一部を除いて、ノートを取ることを禁じられました。したがって、その内容をここに書くことは遠慮すべきだと思いますが、一点だけ書くことを赦して頂きたいのです。それは、

「今あっている朝鮮戦争は、米国の政策の当然の結果であって、これが終われば、次はインド支那半島で戦争が始まる」という内容のことを言われたことでした。熱っぽい語りの講義は、「これこそ理科系の学生に聞かせる文科系の教養の講義だ」と誰もが思うぐらい素晴しかったのですが、先生の予言がすぐに現実となって、尊敬の念は一層強くなりました。

朝鮮戦争の一時期には、韓国軍+米軍は、北朝鮮軍+中国軍に圧倒されて、朝鮮半島南端近くまで後退しました。したがって、板付基地はまさに最前線基地であった訳で、三機編隊の戦闘機が、滑走路から編隊を組んで離陸し、箱崎の講義室の真上を低空で飛んで行きました。その轟音のすさまじさや頻度は、「五十年史」（通史）にも記録されています。戦前の民間航空の飛行場であった雁の巣は、朝鮮戦争では、米軍輸送機の基地となり、理学部本館の屋上からは、数珠つなぎのように縦一列に並んだ輸送機が、次々離着陸して行くのが見えました。当時日本は、航空機を持つことを許されていませんでした。

板付基地は、1944年、日本陸軍が建設を始めたのに由来します。当時、席田（むしろだ）飛行場と呼んでいました。古い地図では、席田は村、板付は字の名のようです。その頃、中学2年生以上はすでに工場に動員されていたため、この建設には、福岡市周辺の中学校（女子はいません）の1年生が動員され、畑を埋めるために、モッコで土石を運ぶ作業に従事しました。機械としては、採石場からバラストを運んでくる陸軍のトラックと、米軍捕虜が運転する2、3台のローラぐらいのもので、毛沢東時代の中国の土木工事のミニチュア版といった状況でした。初夏から次の年の初頭にかけての作業でしたが、1300米とかの滑走路予定地の向こうの端が、無限に遠く感じられました。終戦直前には、偵察機が離着陸できる程度には完成していたようですが、結局は、進駐して来た米軍への贈り物になっただけでした。当時米軍は、南太平洋の島を占領するとジャングルを切り倒し、そこに鉄板を並べて、あっという間に滑走路を作り上げるという話を、子供の私達も知っていました。

なんだか、「のーえ節」みたいに話が続いてしまいました。支部の歴史の期間からはみ出したところで終わりにします。

7. あとがき

近年、和文で原稿を書くことがあるようになり、その結果分かったことは、私には、当用漢字とか、仮名遣いとか、の常識がいかにかけているかということでした。今回も、書き終わってチェックしたところ、随分ルール違反の箇所を見つけました。大体は訂正しましたが、限られた用語では表現がどうしても思うようにできないところは、我流の用語のままになっていることをお断りします。

ここで、資料の調査中に気付いたことを付記します。日本物理学会誌第一巻は、第一号

およびその附録で完結していますが、九州大学附属図書館の収蔵分では、この附録が欠落しているだけでなく、第一巻および第二巻は未製本のままです。さらに散逸することを危惧しますので、善処を要望します。

松村 温 氏 に何か書き残して頂こうと最初に思いついた時、伝える相手としては、支部委員会を考えていました。私にも書くように依頼があって、止むを得ずお引き受けした時点でも、そのように思っていました。ところが、後になって、これが多数の支部会員を対象とした企画であり、しかもそれらの方々の経済的な負担を伴うものであることを知らされ、大変驚き、かつ恐縮しました。いろいろ迷いましたが、結局は腹を括って、大分での話を文章にしましたが、段々厚かましくなって、最後には余分なことまで書いてしまいました。当然のことながら、支部発足当時を実際に体験された方々の多くは、すでに75才を超えておられます。今回この稿を書きながら、私が75才のころには、こういう仕事は億劫になるだろうなと思いました。それもあって、折角書くなら少々余分なことも書いておこうかという気になった次第です。この文のタイトルは、支部例会が勢いを取り戻した状況を表現したくて、余分な字を付け加えたものにしました。つぎにこのような企画がなされた時、「この字は結局は不要になってしまった」ということにならないように念じております。